

真宗大谷派高岡教区教化通信



2020年度 教区報恩講

我身

WAGAMI

第8号

2022年7月1日

題字：常如版の御文

慈悲

第三組眞教寺住職

馬川透

今年の二月にロシア軍がウクライナに侵攻を開始した時、すぐに思い出したのは、三年ほど前に、バルト三国の一一番北にあるエストニアの首都タリンで行われた「西行学会」に参加し、蓮如上人の絵解きと琵琶の弾き語り「西行」を演奏させて頂いた時のことである。バルト三国には、今もスターリン時代のKGBの拷問場所が歴史博物館として残されているので、バルト三国の方々は、かつてのソビエト連邦に支配されていたことの恐怖は忘れていない。また、「西行学会」の中心として世話をなさつておられたタリン大学のアラリ・アリクさんも、「ロシアとエストニアは陸続きだからロシアの国の動向がとても気になります」と、言つておられたので、今回のウクライナへの侵攻は、遠く離れたところでニュースで聴いている我々日本人と違い、エストニアの方々はとても恐怖を抱いておられることが多い。

それともう一つは、十三年前、城端別院の虫干し法要で聖徳太子の絵解きをなさつていたベルトヴァ・アンナさんのことである。アンナさんは、今、ロシアのサンクトペテルブルグ大学の講師をしておられる。アンナさんに、絵解きの指導をなさつておられた、現在龍谷大学の特任教授の阿部泰郎氏は、「アンナさんは連絡をとれない。何故ならメール等が厳しくチェックされていて、ブーチン政

權を批判するような内容などうつかり書き込んだりすると、本人に迷惑をかけることになる」と、言つておられた。アンナさんは、ロシア正教徒で、以前「馬川さん、私、キリスト教と仏教の共通点がわかりました。それは慈悲です」と言わされたことがある。

毎年、城端別院の虫干し法要でさせていただいてる蓮如上人の絵解きには、弥生身代わりの段、本光坊血染めの御聖教の段、源兵衛生首の段など、どちらかと言うと悲劇が多い。こんな蓮如上人の絵解きを一週間聞いておられたアンナさんは、絵解きの何處に慈悲を感じ取つてくださったのか。

余談であるが、六年前に亡くなつた父は、満州に開拓団として行つていたが、終戦間際に、満州に攻め込んできたソ連軍によつて犠牲になつた開拓団の悲劇をよく語つていた。紛争によつて居場所を失つた難民の事が報道されるたびに、過去の自分の事と重なるようにな。そして、「憲法第九条は絶対に変えたらあかんがやぞ」とも言つてた。特に現地で、兄弟姉妹が「腹へつた—腹へつた」と言いながら亡くなつていった。そんな肉親の死を見届けて、実家の父親と自分で帰国し、まさに生き地獄の中を自分だけ生き残つて帰ってきたことへの罪悪感を抱えての仏法聴聞を父はしていたようと思う。

蓮如上人の絵解きにも、多くの悲劇が語られているが、その中で聞法を志す人々が誕生することも語られる。その聞法を志す人が生まれ出される所にアンナさんは、慈悲を感じ取つておられたのかかもしれない。

高岡教区報恩講

1101—11年五月一十九日 於城端別院

コロナの時代を親鸞と生きる

講師 東京教区存明寺 酒井 義一 氏

コロナとの時代がこんなに長い続くとは思ってもかねませんでした。生活は一変し、今までの日常が消えました。

不安や生むつゝや、孤独や悲しみに、ふと襲われる事もあります。このような状況の中、何を大切に生きていいくのかが、ただひたすらに問われ続けています。

そんな自歎生活の中で、新しく見えてきたことやありました。ドキリとする言葉との出遇いもありました。

それらのことを通じて「コロナの時代を親鸞と共に生きる」というテーマで、今の自分を表現してみたいと思います。

(講師からのメッセージ)

今回は法話全文を掲載いたします。

高岡教区YouTubeチャンネルでも公開しています。

2020年度高岡教区報恩講
2020年度高岡教区報恩講
QRコード



講師：酒井 義一 氏

1959(昭和34)年東京都生まれ。東京教区存明寺住職。真宗大谷派ハンセン病問題に関する懇談会委員。同朋会館教導。宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業(青少幼年)スタッフ。自坊ではこども会・こども食堂・グリーフケアのつどい等を開催し、地域社会に開かれた寺院活動を行っている。

著書に『人間回復への道—ハンセン病問題と真宗』(東本願寺出版)、『ハンセン病問題から考える』(高岡教区発行)他。

存明寺ホームページ <https://zonmyoji.jp>

はじめに三帰依文を唱和したいと思います。パーア語による三帰依文です。「」唱和をお願いいたします。

ブッダナン サラナン ガッチャーナ
Buddham saranam gacchāni

ダナーナン サラナン ガッチャーナ
Dhammanā saranam gacchāni

サンガン サラナン ガッチャーナ
Sangham saranam gacchāni

満ち満ちていた、そして今回、できる限りの「」を尽くして、「」して報恩講が勤まつた」というお話がございました。

私の方からも少し裏話を「」紹介いたしますと、今日で接続するのは四回目であります。

過去三回接続テストを行い、音声のチェック、動画のチェックなどをつづけてきました。そ

ういう意味で改めて申し上げます。高岡教区の親鸞聖人に出遇う報恩講を勤めるのだというお志に対し、そしてそれに参詣するのだといふ一人おひとりのお志に対し、心からの敬意を表したいと思います。

私は今、東京の世田谷にある自坊におります。去年の二月二十二日、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、お寺の「」の会が中止になりました。以来、一年三か月が経つたわけですが、生活は本当にガラリと様変わりをしてしまいました。それまで私は、あちらこちらにちょこちょこと出没をしていたので

すが、現在は東京から出る「」とはほとんどありません。といいますのも、やはり東京は感染者が非常に多いですし、現在、三回目の緊急事態宣言中であります。ほとんど毎日お寺におり、自粛生活を行つております。感覚的に申しますと、門のすぐそこまでコロナウイルスが来ている、いつ感染してもおかしくないと。こんな危機感を感じながら生活をしています。そして様変わりしたこの日常の風景、日本の風景、世界の状況を見るだけ、本当にいつまでこれが続くのかという先が見えない不安、あるいはこの先日本や世界はどうなつていくのか、お寺と世界はどうなつていくのか、そういう危機感のようなものを感じながら毎日を過ごしています。

しかし、実はそれだけではありません。やはり一年三か月という長い期間自粛生活が続いている中、最初は辛かったのですが、やはり報恩講を勤められないものかという雰囲気に

皆さん」「んにちは。酒井と申します。先程、竹部教区会議長さんの「」挨拶にありましたが、今回の高岡教区の報恩講を勤めるにあたつて、事前の会議を行つた、その裏話と云ふことで、「」の感染が拡大しているから報恩講をやめようという意見はひとつもなかつた。それどころか、なんとか工夫をして親鸞聖人の報恩講を勤められないものかという雰囲気に

とがあります。ただただ平凡な毎日、ダラダラと「空過」^(くうか)という言葉がぴったりくるような毎日を実は過ごしているというのが正直なところです。危機感もあるがダラダラと毎日を過ごしてしまっている、そのような自分を感じています。

親鸞と生きる

本日、テーマを出させていただきましたが、そのテーマはこういう言葉であります。

「コロナの時代を親鸞と生きる」

今日はいくつかの言葉を掲げながらお話を

おして私に伝えてくださつた。その方々が、

うことだということを、私に見せてくれたと
いうことをとても強く感じています。もちろんお名前も思い出します。その人がおられた、この人もおられた。いろいろな形で時代社会の問題を抱えながら、親鸞と生きるということとはこういうことだということを、背中をと

浄土真宗の教えを学びはじめて四十年ほど経つのですが、この一年三か月の間、私にまで淨土真宗の教えを届けてくださった今は亡き先輩たちのことと時折思い起こすことがありました。先輩たちはこの時代社会の課題をとおして、親鸞と生きるということはこういいました。

コロナの時代を親鸞と生きるということですが、厳密に言葉を言い換えてみれば、コロナという時代の中にあつて親鸞が見出して歩いた道をあなたも生きよと。あるいは親鸞が出遇つたものにあなたも出遇いなさいと。このような呼びかけの言葉として、私には響いてくるような気がしております。

■ 悪世に光る本願

ナの時代を親鸞と生きる」という題を掲げたのですが、これはより正確にいふと、「口口
たちはいろいろな世界から呼び掛けられて
たのではないか」ということを最初に思ひます。

なことはあるだろうが、この時代を親鸞と生きよと、こう私たちに呼びかけてくださつているのではないかということを思いました。そして、この題にさせていただいたわけであります。

最初の言葉は、今年の五月に出遇った言葉です。滋賀県の仲間の住職が寺報を送つてくれました。その寺報の中に「今月の掲示板の言葉」ということで、この言葉があつたのであります。ちょっと読んでみたいと思います。

世の中が悪世であればあるほど
本願は光つてくるのです

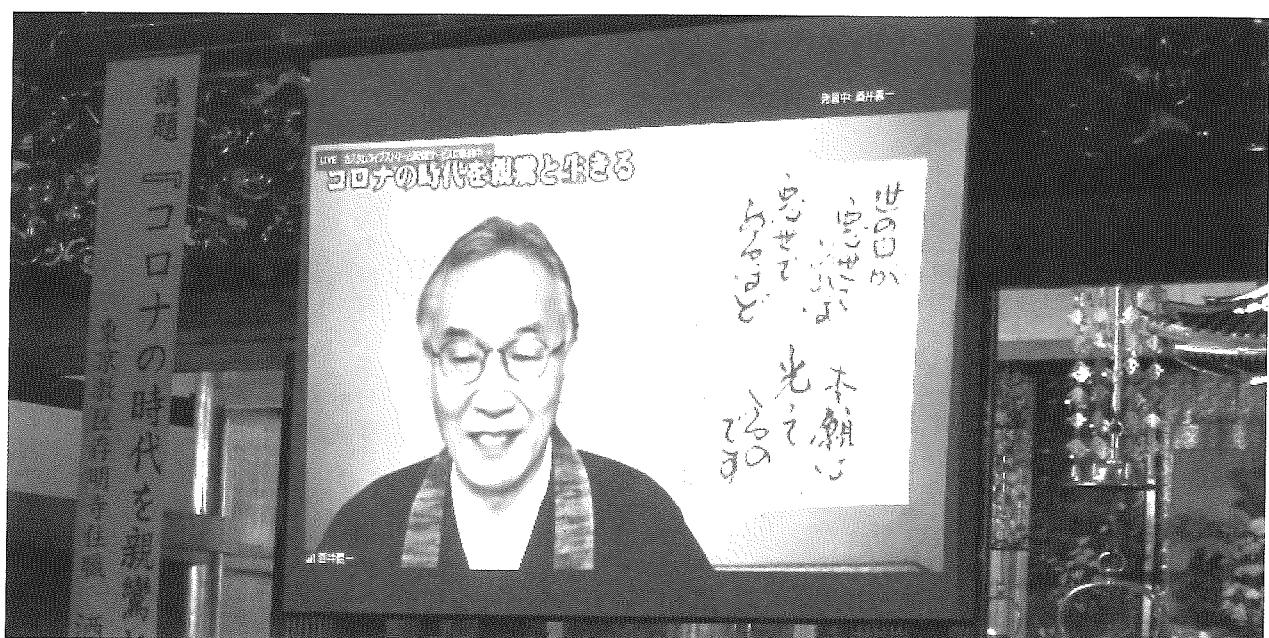
この言葉に触れた時に、本当にズシンと胸
に響いたものがありました。この言葉を発し

ました。ちょっとと読んでみたいと思います。
この言葉は正信偈の源空章の中の「選
択本願弘悪世」という言葉を解説された講義
の言葉です。法然上人は本願をこの悪世に弘
められたということをおつしやつていてる部分
です。

所長まで務められた親鸞の教えに熱く生きら
れた方です。今から三十年以上前にお亡くな
りになられました。しかし、その方がおつしやつ
た言葉は三十年という時を超えて、今コロナ
の時代に生きている私の元にズシンという響
きとともに、そして何ともいえない温かさを
持つて伝わってくる気がしました。早速滋賀
県のお寺の住職に電話をしまして、この言葉
はすごい言葉だと、その前後をぜひ知りたい
といふうに伝えたところ、その住職もまる
で今の時代を知っているかのような言葉だつ
たということで、その全文を教えていただき
たのは仲野良俊先生で、大谷派の教学研究

選択本願悪世に弘む、世の中が悪世
であればあるほど本願は光つてくるの
です。世の中が治まつていても治まつ
ていなくても大事なものが本願ですけ
れども、悪世であればあるほど本願は
光つてくる。人間がどこについていい
のかわからない、何に従つていいのか
わからぬ時に初めて本願が一番の頼
りになる

こういう言葉が書かれているものを読ませて
いただきました。



悪世というのはいつたいどういうことなのでしょうか。仏教では「五濁惡世」という言葉がありますが、悪世の具体的な内容を濁りという言葉で表現しています。濁り、濁つているから先が見えない。一つひとつこの言葉の解説は、今日はできませんが、例えば生きる喜びが見出せない。例えば自分が正しいと、正しさを自分に付けて、周りをすべて悪者にしてしまう。他者が見えない。例えば誰もが幸せを願つてこの世を生きている。しかし、どうしたらその幸せが手に入るのかが見えず、思い通りにならない現実に苦しんでいる。こういう濁り。

いかがでしょうか。私はこの「五濁惡世」という言葉を今読み返してみた時に、まさにこの、新型コロナウイルスの感染という私たちが直面している世の中というのは、濁りある世、悪世ということがいえるのではないか。そんなことを、とても強く感じました。そし

て「悪世だからこれはしようがない、聞法どころではない」と、こうなるのが普通なのかかもしれません。私がズシンと響いたのは、悪世であれば悪世であるほど光り輝くものがいるということを堂々と表現されている方がおられたからです。

■本願に出遇う歩み

それは本願だと。悪世が深まれば深まるほど、本願が光り輝いていく。だから、この言葉を、今風の言葉で表現してみれば、私はこういう言葉になるのではないかと思います。「」のような時代だからこそ、人間を照らし続ける教えに出遇う歩みを。このような時だから、聞法・聴聞をあきらめておこうではなく、このような時だからこそ、本当に、あくことなく、人間を照らし続ける本願、光、教えに出遇う。そういう歩みをどうか大事に

してほしい。こういうふうに私たちは、呼びかけられているのではないかということを思ふ次第であります。

ちなみに、この仲野良俊先生の先ほどの言葉ですが、その言葉の先には、親鸞聖人が説かれた正信偈の世界があります。「選択本願弘惡世」。しかし、その悪世に本願を弘めたのは、師匠の法然上人であります。ですから、法然上人から親鸞聖人、親鸞聖人から幾多の方々を通して仲野先生に伝わり、そして仲野先生から三十年という時を超えて、今を生きる私や、滋賀の住職、他の方々に弘めてくださった、ということを強く思います。このようないい時だからこそ、光に出遇う歩み、教えに出遇う歩み、光り輝く本願に出遇う歩みを大切にしてほしい。私たちはそう呼びかけられているのではないでしょか。

■私の中にいる蛇蠍の心

二つ目の言葉は親鸞聖人の言葉です。『愚禿悲歎述懐和讃』の中にある言葉です。

悪性 さらにやめがたし

こころは蛇蠍のごとくなり

修善も雑毒なるゆえに

虚偽の行とぞなづけたる

(『真宗聖典』五〇八頁)

こういうふうに言うことができると思います。ですから、なんでもない時には、いいのです。一緒にいることができる。ところが、踏みつけられそうになるとか、身に危険を感じた時に、相手を敵とみなし、そしてそのものを攻撃していくのです。これが、「蛇蠍のごとくなり」という心なのではないかと思います。

今時代に目を向けてみると、新型コロナウイルスの感染が拡大してから、様々な人間の心がかたちとなつて現れてくるということが起きました。自粛といふことが言われ、感

ビもサソリも、自分の与えられた環境で一生懸命生きている。ところが、ヘビもサソリも、身に危険を感じた時に、自分の身を守ろうとして、音をたてたり、あるいは毒を持つ牙で相手を噛んだり、あるいは、毒がある尻尾で相手を刺したりする。これは、自分の身を守るために、そういう武器を身につけている、

染拡大を防ぐ為には自粛が正しいと、それに従わない、ルールを守らないお店や人々に対して、それをとがめる、あるいは批判をするという「自粛警察」という言葉が生まれました。今自分は正しいことをしている、自分の身を守るために。しかしその結果、他者を踏みつけにしているということが問題になります。

あるいは、新型コロナウイルスの感染者や、感染者の家族、あるいは医療従事者に対して心ない言葉を浴びせたり、「あっちに行け」と向こうに追いやつたり、嫌い、選んで、捨てるような言動、偏見、差別が、あちらこちらで顕(あきら)かになりました。

普段はいいのですが、自分も感染してしまうのではないか、という身の危険を感じた時、自分の中に元々あつた蛇蠍のような心が、かたちをとつて現わされてくる、

うか。そのようなことを思うわけです。

私の中に元々あつた蛇蝎のような心が、新型コロナウイルスを縁に、現わってきた。守りたいですから、怖いですから。自分の身を守るために、言葉や態度、意識でもつて、相手を攻撃していくという。そして時には、深い傷を負わせたり、死に追いやつてしまつたりすることさえあるのではないかということを思います。

■善としてあらわれる雑毒

ちなみに親鸞聖人は、この和讃の中で「雑毒」という言葉をおつしやつておられます。

「悪性さらにやめがたし こころは蛇蝎の」
とくなり 修善も雑毒なるゆえに 虚偽の行
とぞなづけたる」「雑毒」というのは、雑多
な毒。雑毒の善という言葉もあります。いろ
いろな毒があるのに、善というかたちをとつ
止めた親鸞聖人の生き様ということです。今、

であらわれてくる。こう受け止めていいかと思ひます。いろいろな雑多な毒が中にあるけれども、外にあらわれてくる時は善といふかたちをとつてあらわれてくる。自肅を守らなければいけないよ、感染拡大するよと、善といふかたちをとりながら、自分の中にある雑多な悪、雑多な毒が他者に対して向かつていく。こういうことが、今、現に、あちらこちらで見え隠れしているのではないでしようか。

しかも、大した痛みも感じずに。
宗祖は、そのようなことを「悲歎述懐」ですか
から、悲しみ歎き、痛んだ。私はここがとても大事なところではないかと思つています。身を守るのは当然だ、といつたのではなくて、自らの心を誤魔化さずに見つめた。それは同時に、その心を照らす光に出遇つたからでしょう。そして、見つめて、それを痛ましいことだ、悲しいことだといふうに受け思ひます。

■お寺の現状

さて、三つ目の言葉なのですが、『仏説無量寿經』の中にある言葉をみていきたいと思います。

このような時だからこそ大事にしていきたい

と思ひます。

それで、この二番目の言葉で、本当に申し上げたかつたことは、こういうことであります。自分の身を守るために他者を見失つてはいなか。自分一人を守るため、あるいは自分で繋がる特定の人を守るために、他者を足蹴にしたり、見失つたりしてはいなかろうか、ということが、この時代社会や親鸞聖人から、私たちが問われ、願われているのではないかと思ひます。

道を求めて止まざること

(『真宗聖典』十四頁)

東京のお寺は本当に風景が一変してしまいました。法事をつとめるという人はあまりおられない状況です。新型コロナウイルスの感染が拡大しておりますので、自粛するということで、日曜日は、以前だつたら一件、三件、四件とお寺に皆さん集まつてきて法事をつとめるということが普通の光景だつたのですが、今は法事がゼロという日曜日がそう珍しくないような状況です。それから葬儀ということも、枕経、通夜、そして葬儀という形態が、この一年三ヶ月、まったくなくなつてしましました。増えたのは、一日葬。しかも、もつと増えたのは、直葬。^{じきそう}火葬場に行つて、お棺の前で短い御経をあげ、収骨までご一緒するという形態のお葬式です。

儀式の簡略化は以前から問題になつておりましたが、コロナで一気に加速したという感じです。ですからお寺の経済ということを考えても、法事がなくなり、お葬式は簡略化されしていくということで、お寺の収入もかなり減つております。これはお寺だけでなく旅行業とか宿泊業とか飲食業とかいろいろな分野の方々が経済的に困窮しているということがあるわけですが、お寺の住職をしている私もそのことを感じています。いざれお寺の仕事だけでは生活ができない世の中がやつてくると。たとえば、平日は仕事をして、土曜日や日曜日に法事や聞法会をしていくという時代がきてしまうのではないかと感じています。

■法藏魂とは

それで、ひょつとしたらですが、お寺が淘汰されていく、潰れていくということも起こり得るのではないかといふことも感じることがあります。ですからどうしたらお寺が必要な存在になり続けていられるのかということ

を、やはり考えざるを得ないようなところに身を置いております。これは全国的にそうだと思います。それで私はその時に何か新しい事業をと、たとえば墓地造成事業を行なうとか、納骨堂を作るとか、新たな法事のスタイルを模索するとか、それいろいろなアイデアがあつていいと思うのですが、やはり基本は道を求めて止まない精神をどれだけお寺が表現できるかということにかかっています。お寺が表現できるかと云ふことには、道を求めて止まないかということを思います。道を実践できるかということを思うわけです。

すね。法藏菩薩、阿彌陀如來の因位の法藏菩薩と、その法藏菩薩に影響を与えた世自在王仏との対話ということがこの中に出てきました。先程、竹部教区会議長がおつしやつた「嘆仮偈」を受けて、法藏菩薩があらゆる人が救われる國土を建立したいという願いを起こしました。その願いを成就する為にどうか世自在王仏、私に教えを説いてくださいと、こうお願いをする部分があるのです。それに対して師匠の世自在王仏は

汝自ら當に知るべし

(『真宗聖典』十三頁)

自分でその世界を知つていきなさいと、こういうことを投げかける。すると法藏菩薩は我が境界にあらず

(『真宗聖典』十四頁)

いやいや私はそんなことはできません。どうか教えを説いて、國土を、人々の姿を私にお見せくださいと。こういうことを請い願い奉るわけです。

すると、その言葉に感動した世自在王仏が説法を始めるのですが、その説法の中身は、

「五劫」という長い年月をかけていろいろな國土を見て、そして願いを確かめる。本願という世界をあきらかにされたわけです。だから法藏菩薩といふか、

法藏が法藏たるゆえんは道を求めてやまざと、その広い海の水を一升枡で汲んでいく。

そういう内容なのです。大海、広い海がある

と、その広い海の水を一升枡で汲んでいく。それには本当に数えることができないような

果てしない時が必要になつてくるであろうと。

しかし、道を求めて止まざることあれば、必

ず水はすべてなくなり、その底にある「妙

宝」を得ることができるであろうと。人間

も同じであると、例え先が見えない広い海、

そして深い海、濁りのある海、「生死」の海

が目の前に広がつていたとしても、その中を

道を求めてやまざることあれば、ついに宝を得ることができるものだろう、その宝とは願いだ

と。その宝というのは宝石ではなく願いだと。その願いを得ることができるだろうと、こう

いう説法を得ることができます。こう

いう説法を説かれるわけです。

そして法藏菩薩は「五劫」という長い年月

をかけていろいろな國土を見て、そして願い

を確かめる。本願という世界をあきらかにさ

れたわけです。だから法藏菩薩といふか、

法藏が法藏たるゆえんは道を求めてやまざと

いう、そういう世界を私たちに問い合わせてい

るのではないかと思います。たとえ広くて深

くて限りなくある生死の海が目の前に広がつ

ていたとしても、一升枡を大きな枡にするの

ではなくて、一升枡を使いながら水を汲み上

げていけば必ず願いに出遇うと。こういう世

界を示しているのが『仏説無量寿經』であり

そこで、この言葉は私たちにはできないこ

となのかもしませんが、常にやはり願いに立ち返りながら、この願いに生きていくとい

うことが、これからのお寺や僧侶にとっては、

宝になるのではないかということを思うのでありますか」「今度も中止です」「次回はありますか」「まだわかりません」。こういう返答をしていましたが、私は、その時に感じました。場を求めているというか、来たいと思つてゐる人がいるのだと。そういうことで

■グリーフケアを通して

これは私ですが、コロナの時代になつてお寺の活動というものを去年の春からほとんど中止にしておりました。その中のひとつにグリーフケアのつどいというものが、これは大事な人を亡くした方々がお寺に集まつてこられるつどいです。お勤めをして。「」

法話という、仏法のお話を聞いていただいて、その後で自分の思いを語り合つて聞き合うといふ、課題別の同朋会のようなのですが、それを中止していたのです。三月、六月と。

しかし、その時にあるひとりの女性からお電話をいただきまして、「今月はありますか」「いや今月は中止です」「次回はどうですか」「まだわかりません」。次回になつたら「今度

はありますか」「今度も中止です」「次回はありますか」「まだわかりません」。こういう返答をしていましたが、私は、その時に感じました。場を求めているというか、来たいと思つてゐる人がいるのだと。そういうことで

去年の九月からお寺の行事を中止にするのはやめようというふうに思いました。今はオンラインZOOM（インターネット上で会議などができるアプリケーション）と生参加という形で、選べるふたつの形でお寺の行事を再開しているところです。それで、九月のグリーフケアのつどいでお電話をいたいた女性が来られて、その方がおつしやつた言葉はとても印象に残っています。

その女性は四十代くらいの女性なのですが、妹さんを急に亡くされた。事情はちょっと省略しますが、妹さんが亡くなる。そんなに仲が良い妹ではなかつた、だから妹が亡くなつたということを聞いてもそんなに深いショックを受けないだろうと思つていた。ところがそれからコロナになつて、もう本当にどうしていつたらいのかがわからないというふうに思つてしまつた。そしてネットで探してこういうつどいがあるということで電話をしました。そこで、その方がおつしやつたのは、妹を亡くしたということをともと辛いことだけれども、そのことをどこにも吐き出せない、誰も聞いてくれない、これがとても辛いのだということを、私のお寺に来られて語られたわけです。

その方がおつしやつたのは、こんなことになるのであれば、なんでもつと妹と言葉を交わし触れ合うということを大事にしてこなかつたのかという、後悔、罪悪感、自責の念。そういうことを語つていかれたのです。その時に集まつておられた方々が、実は私も後悔の思いがあるのでという形で、本当に小人数だったのですが、自分の思いを正直に告白、表現

された方に共感というのが広がったような気がしました。

■道を求めている人との出遇い

そこで、私はその時にづくづく思ったのですが、この人だと。道を求めて今を生きている菩薩様はこの人のだと。だから法藏菩薩が世自在王仏に出遇つて、道を求めて止まずといふ言葉をかけられて、そしてそれを実践されていったということは、やはり世の中には菩薩という形をとらずに、道が見出せなくて道を求めている人はおられるのですね、このコロナの時代の中で。そして、その人たち一人ひとりと出遇いながら道をたずねていくということは、これは今私たちがしていかなければならぬことではないかと思います。

今、おひとりのことをお話ししましたが、お寺の住職をしておりますと、今までそう

でした。いろいろな人々がお寺に訪ねてこられた。いろいろな人生をへめぐつて、その中で何かを抱えて、そしてそれが自分を押し出すようにしてお寺の場に座るという方は、一人や二人ではありません。やはりそのことを信頼して、お寺が本当に道を求めて止まずといふ精神がみなぎるような場所として存在し続けるということ。それが私は淘汰されいく世の中にあって、生き残つていく道、お寺が生き生きとあり続ける道ではないかということを強く思います。

(『真宗』一九五六年四月号)

これは親鸞聖人の七百回御遠忌の五年前に発表された文章ですが、今のコロナという現実を通してこの言葉を読んでみると、いかがでしょうか。なにか、今に向かつて私たちを励ます言葉のような気がしてきます。**懺悔と求道の実践**と。このことがなければ、本当に教団のひとつの大宝だと思っていますが、その宗門白書の中に、こういう言葉があることを改めて発見しました。

宗門は今や厳肅な懺悔に基づく自己批判から再出発すべき関頭にきている。懺悔の基礎となるものは仏道を求めてやまぬ菩提心である。混迷に沈む宗門現下の実情を打破し、生々澁渾たる真宗教団の形成を可能にするものは、この懺悔と求道の実践よりほかにない。

■道を求める勇氣

それで、「宗門各位に告ぐ（宗門白書）」という文章がこの教団にはあります。私はこれも教団のひとつの大宝だと思っていますが、生々澁渾たるこの教団の再生はないのだと、いう言葉は、今でも通用する言葉ではないかと思います。この二番目の中で申し上げたか

たことは、今本当に私たちに必要なものは、道を求める勇気。人々とともに生きる姿勢。こういうことがいえるのではないかと思います。

ちなみに、私は簡単にそれらが消えてしまふようなものを内に抱えています。道を求める続けるというよりも、のんべんだらりと日常生活を過ごすとか。或いは人々とともにといふよりも、自分さえ良ければということに常に傾いてしまうのですが、しかし先ほど「二種深信」の話がありましたが、そこが聞法の原点というか、だからこそ道を求めるのだというふうな呼び声が、届けられているということも、譲れない点ではないかと思います。

■コロナウイルスから問われる」と

四番目の言葉はこういう言葉です。「コロナから問われている私、何を大切にして生き



るのか」という、こういうテーマでお話したいと思います。「コロナウイルスから人類への手紙」という詩があるので、ご存じでしょうか。この「コロナウイルスから人類への手紙」というのは、ある方が去年の今頃インターネットの世界に投稿して、それがいろいろな国の言葉に訳されて、日本にも伝わってきたというひとつ詩なのです。ちょっと長いですが一節を読んでみたいと思います。

コロナウイルスから人類への手紙

リーチ・R・リビアンス

地球は囁きました

でもあなたは耳を貸さなかつた

地球は話しました

でもあなたは聞かなかつた

地球は叫びました

でもあなたは耳を塞いだ

そして私は生まれました…
私はあなたを罰するために生まれたので
はありません…
私はあなたの目を覚ますために生まれた
のです…

こういう書き出しから始まる詩で、コロナウイルスが人類の今までの在り方、生き方を問うて続けているという内容の詩なのですね。私がこの詩を読んだのは実はつい最近のことです。五月になってから、お寺の「門徒にこういう詩がありますよ」と教えていたので、本当にドキリとしました。もうちょっと別の一節を読んでみたいと思います。

毎日何人が殺されようと
地球があなたに話そうとしていることを
心配するより、最新の iPhone を持つこと
の方が大切だった

「…」もドキリとしました。世の中に様々なことが起こり、人が苦しみ、人が亡くなる。そのことで涙している人がいる。しかし、あなたはそのような中にあっても自分さえ良ければそれでいいと。自分さえ安泰であればいいと。そして最新の iPhone を何よりも大切にしていたという。ドキリとしました。iPhone という言葉をいろいろな言葉に置き換えていけば、何か自分が見透かされているような感じがしたのも事実であります。

断つておきたいことがあります。この「コロナウイルスから人類への手紙」というのは、ある方がコロナウイルスを私はこのように受けとめているという、自覚のある言葉입니다。あなたはただ、自分の生活を続けていただけの憎しみがそこにあろうと

であります。もちろんコロナウイルスが、こういう理由で生まれたという科学的根拠を表すものではありません。コロナウイルスがこういうふうに今、私たちに問い合わせているのではないかという、自覚を伴った言葉であります。世の中には実際、コロナウイルスによって経済的に貧困し、非常に辛い思いをしている方がおられますので、その方に對して、これはコロナからの問い合わせなのだというようなかたちで他者に押し付けてしまえば、それは本来の意味から逸脱してしまうことでしょう。諦めとか説得になってしまっててしまうでしよう。しかし、私はこの状況をこのように受け止めていますという、自分の生き方として、一人ひとりの受け止めということが確かにあれば、それはコロナによつて苦しんでいる人に伝わっていくことだと思いますし、共感とか連帯というものを生みだしていくのではないかと思ひます。

■親鸞聖人のお手紙より

それで、問われているのは私の生き方といふことであります。この時にあたつて『末燈鈔』の親鸞聖人の言葉を振り返つてみたいたいと思います。『末燈鈔』の第六通

なによりも、こそことし、老少男女おおくのひとびとにあいて候うらんこそ、あわれにそらえ。——中略——おどろきおぼしめすべからずそらう

(『真宗聖典』六〇三頁)

このお手紙は、コロナウイルスが感染拡大する中で再三いろいろな方々が取り上げているお手紙であります。書かれたのは親鸞聖人八十八歳の時。因みに八十九歳、九十歳の時の著述はありませんので、親鸞聖人がこの世

に残された最後のお手紙というふうにいわれています。

「ことし」ですから、昨年そして今年という意味合いでですね。多くの人々が次々に亡くなつていく。これは疫病とか食餓饉があつたと。天変地異や飢饉、疫病といふようにいわれています。因みに正嘉の大飢饉、正元の大飢饉ということがこの頃に起っています。ですから、そのような中で疫病も流行り、人々がどんどん亡くなつていく。その時にあたつて親鸞聖人がおつしやつたのは、「おどろきおぼしめすべからずそらう」と。これは驚くなということよりも、

私は「驚くだけでは終わつてはならない」というふうに勝手に読み換えていました。人々が驚いているわけですから。次から次へと亡くなつていく、流行病によつて。今ほど原因や状況もはつきりしない中で、人々が次から次へと死んでいく。そして、恐れおののいているわけです。そのような状況の中で、親鸞

聖人は驚くななどいふことはおっしゃらないのではないかという勝手な思いがあります。

これは、より厳密にいえば「驚くだけで終わつてはならない」というふうに、私は今受け止めています。

■今こそ本当に大事な言葉にかえれ

なぜならばその証拠に、何をこの手紙でおつしやりたかったのかということについて、親鸞聖人は、その最後の方で、とにかく身を守るうと、自分さえ良ければというかたちではなくて、ご自身が若い頃に法然上人から教えられた本当に大切な輝きのある言葉を語られています。それは

浄土宗のひとは愚者になりて往生す

(『真宗聖典』六〇三頁)

という言葉であります。これは法然上人から確かに聞いたと。このことをこそ今大事にすることだと。そういうことを八十八歳になる親鸞聖人はおつしやつたわけであります。

だから本当に危機的な状況、食べ物がなくなり、飢餓となり、疫病が流行つて、人がバタバタと亡くなつていく状況の中にあつて、宗祖親鸞聖人は何を大事にされたのか。iPhoneなかのなかといふことですが、そうではなかつたのですね。やはり、自分にまで温かなものを伝えてくれたその人。そして、その人の言葉、そして言葉が指示した世界といふものを何よりも大事にしよう。これが、宗祖親鸞聖人のお心ではなかつたのかと思います。「なによりも、こぞことし、老少男女おおくのひとびとのしにあいて候うらんことこそ、あわれにそうちえ。ただし——中略——おどろきおぼしめすべからずそうちえ」。驚いて終わつている場合ではないと。そして「淨土

我身

今日はコロナの時代を親鸞と生きるといふ大きな題を出してしまつたのですが、これは言うまでもありませんが、私が今きちんと親鸞と生きているといふことが言いたかつたわけではなく、コロナといふ時代を親鸞が歩んだように生きていきなさいと。あるいは、親鸞が出遇つた世界とあなたも出遇いなさいといふような呼びかけとして、私は大事にして

宗の人は愚者になりて往生す」という、本当に自分を振り動かし、励まし、温かくさせた言葉。つまり教えや世界にこそ、帰つていく時が今という時なのではないかと。そして八十八歳になつた今も、少しも忘れられない師匠の仰せであるといふ。こういうことを見つめられた親鸞聖人が、このお手紙の中には確かに生きているのではないかと思ひます。

ですから本当に私の生き方が、コロナから静かに静かに問われているのではないかといふことを思う次第であります。

かつて私は、虚しさや不安や悲しさや辛さというものは、人間が生きる上で妨げになるものなので、そういうものがなくなつていけばどれだけ自由に堂々とこの世を生きていくか、ということをずっと思つてきました。ところが、縁があつて、親鸞聖人の世界に飛び込んでみると、虚しさや不安や悲しさや辛さということをとても大事に大事に抱きしめている世界がそこに開かれていくということを、強く感じました。それらのことに背中を

いきたいと思つています。

世の中には、本当にいろいろな出来事が起つてゐます。今はコロナ一色ですが、そのコロナのことについても、様々に人間が織りなす闇がかたちになつて現れてゐるわけです。その現実の問題を通して、今私たちが大事にしなければならないのは、親鸞聖人その人が出遇つた世界に私たちも出遇つていくといふ、この一点ではないかと思ひます。

かつて私は、虚しさや不安や悲しさや辛さというものは、人間が生きる上で妨げになるものなので、そういうものがなくなつていけばどれだけ自由に堂々とこの世を生きていくか、ということをずっと思つてきました。ところが、縁があつて、親鸞聖人の世界に飛び込んでみると、虚しさや不安や悲しさや辛さということをとても大事に大事に抱きしめている世界がそこに開かれていくということを、強く感じました。それらのことに背中を

押されるようにして、人は道を求めて歩み続けるのだという。こういう心を大事にせよと言われたような気がしています。

今コロナという時代を迎えているわけですが、その中で、本当に大事にしていきなさいと呼びかけられていることは、これしかないのではないかと思うのです。いろいろな問題に直面している私が、ひとりの求道者に立ち返つていくと、ひとりの道を求めて歩むものに常に立ち返り続けていく。これが本当に私の実践課題であり、あるいは、多くのこの世を生きる一人ひとりの人間の実践課題ではないかと思う次第であります。

私が今いる世田谷のお寺で、私は長男として生まれて、嫌々お寺の跡を継いだのですが、親鸞聖人の教団に入つてみると、今まで出遇つたことのないようなキラキラとまぶしい生き方をしている人たちがおられて、その方の後を追うように、真似をしながら、自分も寺を聞法の道場にしていこうという願いを先輩たちからいただいて、コツコツとやってきたわけです。私にとつては先輩たちと出遇つたということは忘れないことであつて、それは温かさと厳しさという、両極端のふたつの

ことを教えていただいたような気がしています。人間を包み込むような温かさと、本当にそれでいいのかというような厳しさ。そのような教えの世界を自分なりにお寺で表現していくこうと思っています。いろんな方々がお寺に集まつてきて、そしてその方々も道を求めていこうという一点で、つながつて一緒に場を作つてきたということがあつたと思うのです。

しかし、去年からその場がもてない、密であつてはならないということで、当初は今までコツコツやつてきたことを否定されているような感じがして、元気をなくしてしまった時があつたのですが、ただ、してはならないのは、密になることであつて、聞法をしてはならないということではないわけです。ここはやはり本当に、きつちり分けて考えなければならぬことです。

■新しいチャレンジ

ありあまる自粛生活の中で、私は今いくつか新しいことにチャレンジしていくと思つています。身近なことで言えば、お寺の空い

■五箇の今じむ出遇いを

いうことを、忘れずにやつていきたいと思つてあります。

自分の在り方が今、静かに問われています。

むしろ時代は苦しみとか悲しみとか孤立とか虚しさとか、いろいろなことがあらわになつた時代です。だからこそ本当に光り輝くのが本願なのだということを表現している先輩もおられるし、だからこそ人間が教えに出遇うということを大事にしていくべきなのだと

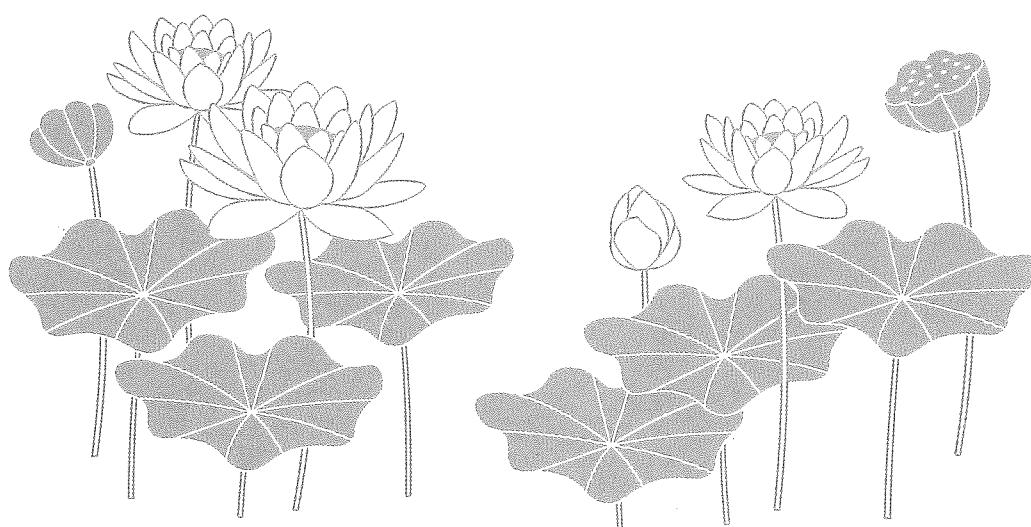
いうことを、今こそ浄土真宗はきちんと表現していく時だということを思うわけです。

そのことに対するおろそかであれば、私が途絶えさせてしまうわけです。せつかく今までつながってきたものを、私の代で閉ざしてしまふということにならざるを得ないと想いますので、やはりここは危機感を持ちながら、

それでも可能性を模索して、今日報恩講を勤めるにあたつていろいろな模索をされたと思うのですが、そういう模索・工夫を凝らすと

だから、そのことは、一年二年で考えるのではなくて、大海の水を一升杓で汲むようなものですから、ずっと後になつて子どもや孫が、このお寺で生き生きと聞法道場として活躍するためには、あの時代、コロナの時代を生きた人たちは大変だつただろうと思うけれども、とことん教えに生きて、堂々と道場を紡いだいつたと受け止めてもらえるような、そういう生き方をしないといけない、していきたいと、今感じているところです。

(了)



ほとけの子リーフレット第2弾

『花まつり』

なぜ花まつりというの？

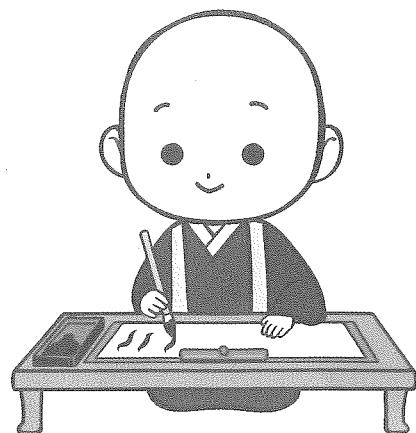
なぜ甘茶をかけるの？

日常の法務や子ども会の場でご活用ください

本山青少幼年センターでは、慶讃事業のひとつとして「ほとけの子リーフレット」の制作を進めています。第2弾として『花まつり』を全面リニューアルしました。お寺などで開催される「花まつり」や、おうちで、子どもたちと一緒に手にとって、ゆっくりと読んでいただくことをイメージして作成しました。リーフレットを開くと、中面には「お釈迦さま誕生の物語」が、裏面には、「なぜ花まつりというのですか？」などの花まつりに関するQ&Aがやさしい言葉で掲載されています。(A6 サイズ・無償)

■お問合せ先■

しんらん交流館(青少幼年センター) TEL:075-371-3440(平日9時~17時)
教務所でもお渡しができます。



編集委員

黒川一紀(第3組隨順寺)
今川信悟(第3組正立寺)
北條康恵(第4組光證寺)
梨谷真嗣(第6組真行寺)

編集委員募集

ただ今、編集委員を募集しております。
協力していただける方は教務所(担当 菊池)までご連絡ください。

【タイトル『我身』について】

「わが身」といいますね、あの「わが身」というものを正しく「わが身」といえるのはですね、やはりこの阿頼耶識ですね。阿頼耶識という——阿頼耶識というものは、このでですね体ですね、この身といふもの——この身といふものをですね、それをちゃんと見ていくと。わが身といふのを見ていくんですよ。わが身を見

(曾我量深『法藏菩薩』より)

編集後記

「我身」に創刊から携わって早八号。

法話や講演を文章に起こして校正するという作業ですが、慣れるに従つて校正作業は楽しくなつてきました。文字起こしについては相変わらずですけれども。

当初は主語と述語の関係を明確にすることにこだわつたり、同じ接続詞が連続しないようにしたり、文章の体裁を整えることばかり意識していましたが、話の内容を深く読み込むところまでいついませんでした。しかし、最近は少し内容が自分の中に残るようになつてきていて、本来一回聞いて終わりのところを何度も文章で反芻することで、聞き取れなかつた講師の思いを少しづづくみ取れるようになった感じです。

確かに時間のかかる地味な作業ですが、続けることそれなりに面白く、自分のためにもなつてゐると思いました。

願わくは編集委員がもう少し増えて、文字起こしの負担が減らんことを。

(黒川一紀)

発行者
真宗大谷派高岡教区教化委員会

発行所
真宗大谷派 高岡教務所

〒933-0912 高岡市丸の内2-15
TEL 0766-22-0464
FAX 0766-24-2215

E-mail
takaoka@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派(東本願寺)
高岡教区ブログ



<https://takaokakyouku.net>